

第6回 TAE (Thinking At the Edge) シンポジウム (2020.3.15 オンライン開催)

TAE 鼎談：TAE の現状と今後

シンポジウムでの発表と参加者から寄せられたコメントをふまえ、2人の講演者（高木先生、村里先生）に司会役の得丸が加わり、ZOOM 会議でディスカッションをおこないました。その内容を掲載します。

得丸：今日は2020年3月20日の土曜日でございます。第6回のTAEシンポジウムのディスカッションをこれから行いたいと思います。講演していただきました高木亜希子先生と村里忠之先生にZoomでご参加をいただいております。これまで皆様からいただいた感想、e-mailでいただいた声、ホームページに投稿いただいた感想を私ども拝見しておりますので、それらを踏まえてディスカッションしていきたいと思います。先生方どうぞよろしくお願い致します。

村里：よろしくお願い致します。

高木：よろしくお願い致します。

TAE の現状

得丸：最初に、私から簡単にTAEの現状についてお話をします。TAEは村里先生が日本に紹介されました。私も村里先生のワークショップで学び始めて2005年に一緒にニューヨークのジェンドリンのTAEワークショップに参加しました。これはTAEの最後のワークショップとしてジェンドリンが行ったもので、ぎりぎり間に合った一人なのかなと思います。その後、国内で村里先生のワークショップに出たり、自分でも勉強したりしてきました。2008年にまず文章表現に応用するという事で簡単なワークブック（『TAEによる文章表現ワークブック』）を出させていただきました。それから、TAEは質的研究に使えるということを考えて、2010年に質的研究に関する本（『ステップ式質的研究法—TAEの理論と応用』）を世の中に対する提案という意味で出版させていただきました。それから2013年から16年に科研の基盤（C）という研究費をいただきました。これはTAEを主に教師が個人の振り返りに使っていくもので、教師だけではなく、一般にも使えるようにウェブページも作っております。以上、文章表現、質的研究、それから個人の振り返りという3つのTAEの使い方を提案してまいりました。その中でシートを作って、シートに記入しながらやっていくという方法と個人で対面でガイドしていくという方法との両方を進めてきました。

昨年、2019年には質的研究法の辞典や高木先生もご紹介いただいた『質的研究法マッピング』にTAEの項目を執筆させていただくことができました。一つの到達点として、ようやくTAEがあるということが世の中に認知されるまで来たかなと思います。2017年には、『アイデア大全』という一般書に「マイセンテンスシート」が掲載されていたのを、書店でみつけた人が知らせてくれて偶然知ったなどということもあり、TAE

の応用範囲の広さというか、面白さが、少し知られるようにもなったのかなと思います。

さて、今回のシンポジウムを主催している TAE 研究会ですが、これは 2006 年頃に始めました。その後、2009 年頃から坂野さんに事務局を引き受けていただきました。研究会を通じて対面のガイドをしながら、また、ジェンドリンの哲学も学びながら、研究会は発展もしていないのですけれども、消滅もしないで地道にやっております。研究会では、どちらかというと TAE を研究や日常生活に使うという限定をしないで、垣根をむしろ取り払っています。TAE パーソンとして生きていくというか、あえて垣根を作らないで、本当にフェルトセンスを感じて、しっかりと生きていくことが、仕事にも個人の成長にもつながっていくということを皆で共有する場になっているのかなと思います。そんな中で今回の TAE シンポジウムは、年に 1 回はやることを数年前に決心し、今年も高木先生にご協力をいただいて、青山学院大学で 3 月に開催させていただくことになっていました。発表が 7 件プラス 2 件で 9 件ですが、研究会で学んだメンバーも何人かいらっしゃいますし、それ以外のところからの参加もあります。今回、教育分野の方が多かったのですが、いろいろな発表がここに並んでいるということが、一つの TAE の現状を一番表しているのかなと思います。私からは以上です。

TAE シンポジウム全体の振り返り

得丸：では、お二方の先生に全体について簡単な振り返りをお願いしたいと思います。まず高木先生、よろしくお願い致します。

高木：はい。今回は質的研究法の観点からお話をさせていただきました。私自身は少し TAE から離れていましたが、今回こういう機会をいただいたことで TAE の位置づけを改めて考える良い機会になったのかなと思います。私自身も TAE の連続講座に 2013 年に参加させていただいた時は、質的研究法というところから入りました。それよりも TAE の魅力は、日常生活から教育まで、あるいは研究も含めて、先ほど得丸先生がおっしゃっていた垣根のないところなんです。自分が連続講座で一番学んだことは、いろいろな分野の方のご実践や取り組み、あるいはフェルトセンスの感じ方や考え方だったので、そこが一番魅力だと思いました。今回いろいろなご発表をお聴きして、多様性を非常に感じました。いろいろな質的研究を考えたときに、それぞれのコミュニティやそれぞれの研究法で限定されていることが問題であったり、初心者が入りにくかったりするところがあります。

今回、本当に多様な発表内容で、31 件の参加者の振り返りの声をお読みして、それぞれの感じ方が、ご自身の背景や経験によって違うことに気づきました。皆さんがフェルトセンスで感じたことをそれぞれ書いていらっしゃって、「違っていいのだ」と改めて感じました。それぞれ、捉え方や疑問が異なり、「そうなんだ」と新しい視点も得られて良かったと思います。皆さんのフェルトセンスが核で、そこでつながっているのが、非常に多様なご発表だったのですが、全て興味深く、分からないこともあるけれども、新しい発見や共感する場面があり、非常に興味深く聴かせていただきました。

得丸：はい。ありがとうございました。次に、村里先生、全体の振り返りをお願い致します。

村里：得丸さんに誘われて、話をしないかということで今回も参加しました。先ほど、得丸さん

は、TAEのこれまでの経緯、特に日本における経緯、あるいは我々における経緯について話をされました。僕はこうやって振り返ってみると、自分の関心、TAEに対する関心は少し得丸さんと違っていただけかなと、逆に今になってわかってきたというかそんな感じもしています。僕にとってジェンドリンは、哲学から臨床心理学に行った人で、そういう意味で僕とはとても重なっています。それからTAEに関してもフォーカシングをやっている方は哲学には必ずしも強い方ばかりではありません。僕は出発点がジェンドリンと似ているなあとと思って入ったものですから、何の違和感もなく、5回のワークショップに出て、英語が分からないのに、とても居心地がよかったですよ。これは何だろうという感じで、日本にいるよりずっと心地良かったのです。それは何でだろうという感じだったのですが、TAEにジェンドリンが取り込んだこと、パターンを取り出すやり方や交差は、僕も子どもの時からやっていたことに気付きました。パターンを取り出すのは小学校で先生より上手かったということも先生も言ってくれました。交差は学問の枠に収まらない形で、様々に面白いことは全部やるという感じでした。芸術にも関心があるし、そこを筋道としてTAEがとても重なりがよいというか、自分の中で自然に深まっていくのです。そういう感じだったのですね。

日本で請われてTAEを教え始めましたが、僕は下手くそでした。ジェンドリンのやり方をそのまま伝えと、皆さん分かったような分からないような、結局分からないということになったと思います。これまでTAEを日常生活に有効に適応できるようにしたのは、僕は得丸さんの功績だと本当に思っています。今回も、そういう意味で例えばお菓子の作り方について話をしておられる方がおられました。この方は自分が作る和菓子がぶさいくで、最初自信がなかったのですが、これはぶさいくな文章を書いて自信がない人と同じですね。でも、自分なりにできればいいのだということに気づかれるのですよ。やっぱりこんなふうに行くのだからというのが僕のまた発見でした。また後で述べたいと思いますが、そういうことをできるようになったのは、ジェンドリンの14のステップだけではなくて、どれを取り出してもやれる得丸さんのシートがあったからです。実際、臨床心理学のTさんは、彼女の大学院生の学生にTAEを教えるのに部分的に使っていますが、それがどうも効果があるんですね。結局は、フェルトセンスをどうしたら言語化できるだろうかというところに、多くの方が戸惑うというか、つかえるというか、躓くというか、これが世界中を覆っている感じがあります。TAEでは、そこにフェルトセンスから言語化するという強力な方法が、非常に濃いエッセンシャルなコアになっていて、これが方法化され、更にそれを踏まえて様々なシートが多分あるのだと思います。質的研究の話がさっき出ましたが、その領域でも、例えば非常に才能のある外国人など文化人類学の研究者たちがいろんな試みをやっています。だけど、それは自分のフィールドをどう研究するかの方法なのです。それが、このTAEだと先に方法があって、それが何にでも使えることが従来の質的研究とは違うところで、そういう普遍性を持っているし持ちうることを示していけるかなという感じがした今回の集まりだったように思います。以上です。

口頭発表内容の振り返り

得丸：ありがとうございました。この間のシンポジウムから2週間近くたっていますが、段々そ

の時の感覚に我々も戻ってきています。ここからしばらくの間3人で7件の口頭発表と2件の掲示発表についてお話ししましょう。村里先生いかがですか。

村里：7件ははっきりと隅々まで覚えていませんが、全体として、皆さん発表者が生き生きしていたかなという感じが、今になって感じられてきます。

得丸：そうですか。

村里：それは従来の発表と何か違った雰囲気かなという気がします。従来の発表は、形式がきちんと守れているかなあとか、そのへんで怒られないかなとか発表していると思うけれども、今回は、皆さんが、自分のフェルトセンスを離れないで発表していました。つらそうになると、そこに戻る、そうすると元気がでるといった話だったのかしらという感じがしています。どうですか。

得丸：確かに、「時間を守ってください」とはお伝えしましたが、やり方については一切なかったですね。どうですか、高木先生。

高木：発表者が生き生きしているということとはとても同意します。フェルトセンスを言語化することが核ということを先ほど村里先生がおっしゃっていましたが、本当にその通りです。それぞれ皆さん興味や経験が違い、誰しも自分の経験から逃れられないのですが、その経験を活かして自分なりにTAEを咀嚼し、発表形式でも多様に言語化していました。そのスタイルがとても面白かったし、いろいろなタイプの発表を聞いて、「これでいいのだ」という安心感が得られました。初めてオンラインで参加された方やTAEをあまり知らない方はちょっと驚かれたかもしれませんが、「これでいいのだ」と思えたのではないかと思います。

得丸：そうですね。高木先生もいろいろな研究会、学会に出ておられると思いますから、かなり違ったものだったのかもしれない。

高木：そうですね。特に学術的な研究では、先ほど村里先生がおっしゃっていたお作法を気にしがちです。権威のある方に何か言われると皆落ち込んでしまいますが、作法よりも大事なことがあります。

得丸：そうですね。TAEを知ってからまだ半年という方も本当に立派に発表していらっしゃいました。先ほど村里先生がTAEは難しいとおっしゃっていましたが、そうでもないような感じですね。

村里：そうですね。

得丸：11月に初めて知った方もいらっしゃいます。2月に実践して、3月にこのように発表しているというのは速いなと思います。音楽の授業について発表されたE先生ですが、TAEは難しくはないというような気もしています。

高木：ただ、フォーカシングの素養がある方は、フェルトセンスを感じて言語化というところがスムーズだと思います。私も含めて、そこに対する不安をどう乗り越えていけばいいのかなというのは常にあります。

村里：高木先生、僕はフォーカシングの場に長くいましたが、ジェンドリンも言っている「フォーカシング・ピープル」の中で、言語化が実はやっぱり難しいという方がとてもおられるのですよ。ジェンドリンはアメリカ人は半分はいると言っていました。フォーカシングはもとも心理臨床ですので、皆さん、感情表出は割とされて得意です。「言語化しなさい」と言

うと、沈黙される方は実はおられます。だからフォーカシングから TAE の流れは、少なくとも現在のところは必ずしもスムーズにいつているとは僕は思っていません。なぜなら、ただ言語化すればいいわけではなくて、フェルトセンスを言語化するというのが大事なのですが、従来の学問研究はフェルトセンスでないものを言語化しています。ところが、心理臨床の場合は、感情表出は得意だけれども、その言語化はけっこう難しいと思います。僕は昔は哲学科にいましたが、哲学者の文章もフェルトセンスから語られていないことはとても多いのです。哲学ではアイデアや思いつきは尊重されるのですが、感情表出という話になるとちょっと危ないゾーンに行きますね。サルトルはそういうことを思いきってやったので、ジェンドリンはサルトルを評価しています。分野ごとに近代の学問が分化されていって、細分化されていったので、それが進めば進むほど精緻になるという錯覚があると思います。それを TAE がもう一回包みなおそうとしているというか、土壌を足で踏みつけて、ここを何かぐちゃぐちゃにして、そこから何かを芽生えさせようとしているような感じがありますが、得丸さん、どうでしょう。

得丸：そうですね。今回教育のご発表が多かったのですが、私自身が教育の場にいるということもあって、教育というところが、ある種バランス的には心理でもなく哲学でもないところで、バランスを取りやすい第 3 の場所なのかなという気がしています。やはり、こういう研究会に来てくださるとか、TAE の講習があったときに興味をもってくださる先生は、ある意味普段からフォーカシング的なことをやっている先生なのかなあとと思います。フォーカシング自体は普通に人がやっていることをはっきりさせただけで、特別なことをさせているわけではありません。先ほど、村里先生がフェルトセンスを感じたり、交差したりすることは子どもの頃からされていたとおっしゃっていました。どちらかという、そういう方が教育で何か大切なものに気付いているようなところがあって、響き合う方がいらっしたり、話を聴いて残ってくださったりしているのだなと思ったりもしています。教育の現場は、フェルトセンスを抑え込もうとか、そういうネガティブな場でもあるし、逆にそれに気づいてもらうとか、それをもっと元気にしていく場でもあるかなと思ったりもします。今回、英語教育のご発表が 2 つありましたが、どちらも不安など、情緒面のことを扱う研究になっています。そのあたりは、外国語教育、英語教育がご専門の高木先生、いかがですか。

高木：外国語教育、特に英語教育あるいは第 2 言語習得という学問分野では、これまで伝統的に、どのような指導をすればより成功した言語学習者を育てることができるのか、より上手く言語習得ができるのか、成功者に焦点を当てた研究が主流でした。海外の研究を見ると、法的的に言語習得は進んでいかないため、情緒的な面やアイデンティティの問題などが、ここ 10 年ぐらい非常に注目されています。また、量的研究者の間にも、複雑系理論など多様性を見ていこうという流れはあります。特にこの情緒的な面は、非常に捉えにくいもので、成功体験だけでなく、学習者の視点からの不安や上手くいかないことも含める必要があります。上手くいかないことは、言語学習だけで捉えています、上手くいかないことが悪いことであるような二項対立で捉えてもあまり意味がないと思います。それに、人は変化していきますから、上手くいく時期もあるしそうでない時期もあるので、人をホールで捉え、人だけでなく、社会との関係性もミクロ、メソ、マクロレベルで捉えることができると思いま

す。個人の問題もあるし、個人を取り巻く学校などの身近な場面からより広い社会の圧力もあります。全体を考える時に、TAEは身近なところから始まってもっと広いものも捉えられるので、今回興味深く発表を聴き、TAEは適していると思いました。

得丸：なるほど。日本人は皆英語にコンプレックスを持っていて、子どもからお年寄りまでエッジのような感じで、英語ができることが人間として格が上がるという変な何かがありますよね。

高木：変な価値観がありますね。

得丸：TOEICの点数を気にするなど変な価値観がありますが、そういう意味でこの2つの研究は視点の取り方自体が私ども専門外者からすると新しいですね。私は日本語教育が専門ですので、テーマ自体も新しい感じですが、村里先生はどのようにお聴きになりましたか。

村里：僕は、英語は超下手な人間ですが、ジェンドリンのところに行っていて勇気づけられた体験があります。僕はあそこでメアリーと一緒にワークをやるまでは、その言語にとっても熟達していないと詩を作れないと思い込んでいました。ところが、僕みたいなつたない英語を話す人間でも、いつだったか僕が書いた英語をメアリーが「Tadayuki is so poetic!」と大きな声で叫んでジェンドリンに教えてくれたのです。以前、どこかにも書きましたが、武満徹という作曲家が自分の作品に英語のタイトルをつけています。彼は英語が上手な人では全くないですが、とても良いタイトルだったり、良い英語なのです。どこが良いかという、言葉に彼の音楽を彷彿とさせるような姿というか、ポエティックな感じが漂っているのです。「あー、フェルトセンスと言語はこんなに近いんだ」という気づきが、僕を楽にさせていたのです。日本語でも堅い言葉を使ってその上間違いを怒られたりすると、自信を失くします。たぶんいろいろな教育がそのところを取り間違えているのではないかなと思います。綺麗な形のお手本みたいなところに到達するのがよいというのは、僕に言わせるとお金とか業績とか地位とかと同じような外部的な価値基準です。そうではなくて、自分の内側が言葉になったとき、そしてそれが他者に伝わったとき、伝わるときは、当然他者には微妙に違って伝わるのだけれども、そこでつながるわけですね。その体験が人を連帯や理解や安心やハピネスに導くのだらうなという感じがあって、そこに関しては本当に今のいろいろな教育分野で、根本的なところにくさびを打ちこんでいかなくはないかなというところがあるかなという気がしますね。

得丸：なるほど。ありがとうございます。ちょうど、村里先生からメアリーとジェンドリンとの詩のエピソードが出ましたが、今回の発表でも詩を扱ったものが皆さんの感想の中でも多くありました。ひらがながおぼつかないような方でも日本語で詩が書けるということで、まさに今、村里先生がおっしゃったことと近いことがそこで起こっているのかなあという感じがしました。それから、音楽についても武満さんのことをおっしゃいましたが、音楽の発表も一つあり、これに関して感想を述べておられる方も多かったですね。詩や音楽などそのような感じのそういうこととフェルトセンスやTAEの親和性については、「フェルトセンスと言語はこんなに近いんだ」という村里先生がおっしゃったことを私は、今、思わずメモしましたが、高木先生いかがですか。

高木：そうですね。フェルトセンスから会話を作るワークなどから、自分の子供時代の国語の授

業を考えたときに、とにかく原稿用紙を埋めなければいけない、何か書かなければいけないということが先だっていました。例えば、写真を見て、文章にしないで感じたものをぼつぼつと言葉にまず出すという段階が全くありませんでした。TAEのステップで、ぴったりくる言葉ではないかもしれないけれど、フェルトセンスから出てきた言葉をまずぼつぼつ出す段階があるというのが非常にいいなと思います。詩という型に、また当てはめないといいないかもしれませんが。

村里：子どもに音楽を教える発表がありましたよね。あの発表を聴いていて、この人はなぜ僕にインタビューをしないのだろうかと思いました。小学生の仲間に入って、授業に出て答えを書きたくなりました。それは、一つは僕は音楽を音楽の学校の生徒みたいに形式で学ぶということが全くできていなかったからです。音感もたぶん悪いのだと思いますし。でも音楽は僕の命だったのです。ずっとそれに支えられて今までやってきたという気持ちがあって、まさに彼が扱っているのは音楽の形式面ではなく、それをどう感じるかという側面に焦点を当てて子どもにインタビューしたりしていましたよね。あれが、ずっと自分がやってきたことだなということがありました。あるとき音楽会に行くと、僕は終わった後、一緒に行った友達に会場を出てそれについて話していたのです。そしたら、「村里さん、何でもかんでも言葉にする」と怒られました。そういう意味で、音楽を言葉にして啓蒙に大いに貢献した吉田秀和という人物がいます。ジェンドリンの文章も他の人の文書もそうですけれども、時々言葉が自然に詩になるという時があります。それは、フェルトセンスから雫のように絞りとられた言葉、詩です。最初は韻を踏むとか形式が先にある、そういう伝統も詩作にはあるのだけれども、片方で現代詩などはそういう形を壊すじゃないですか。そうすると、フェルトセンスしかないですよ。だけれども、その両者が形と内容というのかな、最近になって形も大事だなという感じもやっとしてきています。新しい自分の課題としては、もう1回現代的な文脈において形と内容が統合されることはいろんな分野でたぶん必要なのだろうという気がしています。フォーカシングよりその前提に言語化を決めていますので、TAEはまさにそういうところに強いところだと思います。言語というのは上手く話せなかった沈黙も大切なだけれども、まずく話すより沈黙は良いのです。これは臨床でも言えることですが、人間はずっと沈黙してはいられません。統合失調症のように重い症状を持つ人でもそうです。だから、自分の内側から何かしら言葉が出てきて、そうするとその人自身が開かれるのです。それが治癒なんです。だから、どうでもいいような健康な人間に戻るというのは治療でないというのが僕の立場です。そのへんの勘違いは世の中にたくさんあると思います。こんなにつまらないことに戻ってしまっただろうと、僕なんかはそう思っているのですね。

得丸：なるほど、そうですね。形式と内容、形と内容ということですね。発表への感想の中にも認知という言葉が出ています。形式と認知は同じではないですよ。全然違いますね。

高木：他に、認知と知覚と感受がありました。

得丸：感受も出てきますね。

高木：音楽の発表で知覚を使っておられました。

得丸：そうですね。国語の笑いについて考えるという国語の授業の発表もありました。あとは、

国語の授業の言葉の扱い方がありました。全然違った内容では和菓子を食べてしまうというのもありました。これもコメントをかなり多くいただいていたものですが、形式と内容ですね。食べてしまうというのは、どうなのでしょう。

村里：知覚という言葉に関しては、実はメルロ・ポンティはカメラをモデルにしている心理学の知覚とは全然違った使い方をしています。メルロ・ポンティの知覚はフェルトセンス、身体知っぽいのです。だからジェンドリンも一時期、とてもメルロ・ポンティの著作を読んでいます。そのことについては、まだいろいろな哲学者が言及はしているし、関心を持っているのですが、カメラ的な視覚やマイクロフォンの聴覚でなくて、もっと身体の中で統合される知覚みたいなフェルトセンスの大事さがまだ現代文明の中にあまり取り入れられていません。2割か3割がせいぜいでしょう。7、8割はそうでない知覚、機械的な知覚という状態かなと思います。

得丸：なるほど。先生、認知はどうですか。

村里：認知も心理学には功罪がいろいろあると思います。例えば認知症という言葉があります。僕が割と素晴らしいと思ってるお医者さんは、もっと意味が広いはずだから認知ではなくて、認識という言葉をあえて使うということを最近彼の本に書いていました。認知でも認識でも、あるいはパターンをつかむというのでもよいのですが。パターンをつかむというと、ダンスでも音楽でも絵画でも言語でも広がります。言葉を使用する場合に、そういう意味での認知、認識、知覚が意識されるようになっていくといいなと思います。

得丸：なるほど。S先生の国語の発表も笑いを色になさったりしていますね。今、村里先生のお話で、言語だけではなく、音楽、色、絵画、ダンスなどにも通じていく意味での認識、パターンをつかむというのは、なるほどと思いました。

高木：お話を聴いて思いましたが、フェルトセンスを感じる、喚起するのに、今回の発表で、五感の役割が大きいと思います。写真を見て喚起されるもの、音楽は聴く、和菓子は触る、食べるで、感じる時にも五感を使います。言語化するとき色で表す例がありましたが、表出するときも五感を使うと言語化しやすくなるのかなと思いました。

得丸：なるほど。

村里：和菓子は、色も、視覚も使いますね。それから触覚と味覚を使います。

高木：全部使っていますね。

村里：聴覚はあまり使っていないかもしれませんが、嗅覚はもちろん使っています。だから和菓子はいろんな感覚を動員する、そのような対象なのです。それをこれだけ深めている日本文化というのは、これはちょうどフェルトセンスをつかむのは日本人が上手だとか、フォーカシングは日本人が割と西洋人より上手いとか、ジェンドリン自身もそれは認めています、そういうこととつながっているように思いますね。和菓子の制作は、出るべくして出たみたいな感じが僕はしました。そこは彼女はもうできていて、彼女にできていなかったのは、綺麗なお手本どおりにできないということです。でも、和菓子を作って目の前に置いて食べてみたらとても満足感が得られたというのは僕はすごいなと思いました。とても教育効果が上がりますね。

得丸：確かに。E-mail でいただいた感想の中にも、和菓子の経験を書いてくださった方もいら

っしかったです。似たような経験や自分が料理を作るということになぞらえて感想を書いてくださった方もいました。そういうところにジェンドリンの TAE は説明がつくと思います。先ほどパターンをつかむとおっしゃいましたが、それは体験としてはよく分かるのだけれども、そこをこのように説明をつけてつないでくれるようなものは、なかなかないのではないかなという感じがしています。

村里：そうだと思います。

得丸：他に、「自己賞賛による不安減少」も非常に視覚的な表現で、結果の表現にも色を使っているっしかったですね。いろいろなことに TAE が使えますが、だからこそ理解されにくいと感じています。

村里：そうかもしれません。

得丸：TAE はインタビューなどのデータ収集方法、分析方法に使えますが、研究論文などを書くこうとするときに、TAE はどこに位置づけられるのだろうと、そこでつまずいてしまうようなところもあります。今回、高木先生が全体像を示してくださったことは、我々 TAE に取り組んでいるものとしては、俯瞰できたところもありますが、皆さん一つの場所におられるのでなかなか難しいですね。例えば量的研究の方だったら、世界観はあまり問わないで研究をされるでしょうし、「そのような見方もありますよね」という感じもしました。ご質問の中にも「TAE を使ってしまうと自分は現象学的な世界観に立脚していることになってしまうのですか」というのもありましたが、そういうわけでもないですね。

高木：そういうことでもないです。そのような考え方があることを知っていることとよいということですが、あのよう整理してしまうと結局全てを型にはめてしまうということにもなってしまいます。論文などを書くときには、丁寧な説明が必要なので、読者に分かりやすく説明するために、大枠があることを知った上で TAE を捉えると捉えやすくなると思います。認識論については、実際は論文に書きませんので。

得丸：そうですよね。先生もおっしゃっていました。

高木：自分の分野の先行研究を追うことでせいっぱいなので認識論までは追えないですね。私が一番言いたいのは、TAE を単なるデータ収集法や分析法というレベルで捉えてしまうと、論文にも上手く TAE の豊かさを説明できないということです。したがって、少なくとも方法論レベルまではしっかりと分かっていることは大切です。でも論文を書く際には、個別の専門分野に合わせて、各自が TAE を説明すればよいと思います。

得丸：全体が分かったという感想をたくさんいただきました。TAE について自分の論文に書くことだけではなく、知っていたり、踏まえていたりすることで、自分はどう考えるのだろうかという自分のへの問いかけになっていくのかなと思います。

高木：そうですね。一人ひとりの専門分野も経験も違うので、対話するきっかけぐらいの捉え方でよろしいかと思います。

得丸：よく論文を書いていると次のテーマが見つからないという方の話を聞くことがあります。けれども、その背景にあるものとの対話をしていけば、次のテーマが見つからないなどというのはぴんときません。

村里：そうですね。

得丸：分からないこと、知りたいことがたくさん出てくるのではないかと思います、いかがですか、村里先生。

村里：それに関して思いついたことがあります。ミッシェル・フーコーが、ある本を書いたときに「背景にマルクス主義があるのではないかと問われて、「あるだろう」と答えました。

「自分はトラック一杯分のマルクス主義のメモを残している」とも言いました。だけど、この本ではマルクスに関して一言も言及していないとのこと。そのように奥にあるもの、表に出てくるものは一部なのであって、それは出したいとか出す方向性、角度、誰に読んでもらうかによって決まってくるわけです。でも、生きていくということはもっと深い部分があって、そこは当然形にならないもので、未解決なものを山ほど含んでいます。そこに浸っていると、次のテーマが見つからないということは全くありえないですね。そういう方には背景の深いところを薦めてみてもよいのかもしれませんが。現象学ということは、割と言われますけれども、「現象学と経験論はどう違うのですか」という問いは僕も決着はついてないと思っています。ジェンドリンも「自分は根本的な経験主義者だ」と言っています。ウィリアム・ジェームズをととても大事にしていますし。とても面白いのは西田もウィリアム・ジェームズをととても大事にしていることです。ここは、まだはっきりしていません。だから、そういう部分を現象学という既成のもので捉えるのはやめましょう。僕はやめるのがTAE的な、フォーカシング的なやり方だと思います。分からないけれども、全く分からないということはないですね。身体知は何かしら伝えてくれます。コンラート・ロレンツは現象学をすごく推奨しているけれど、西田は部分的には批判しています。彼らが何をどう言っているかは僕はまだまとめきれていなくて、そのへんも、次の現象学以降、次の哲学にもつながることだと思います。ジェンドリンは、そういうところに自分を開いています。何だろうという感じで、次の人たちに皆も何だろうと一緒に次を考えてくれないかなと期待している感じが僕はいいかなと思います。

得丸：なるほど。高木先生のご講演を聴いて、参加者から哲学も質的研究の一種であるというコメントもありましたね。とても驚いたのですが、それは哲学をどう捉えるかということにもつながっていて、もっと本当に生きていくこととか、自分のことでしょうか。実践哲学ということも村里さんもいつもおっしゃったり、ジェンドリンも言ったりしています。そのような広さ、深さ、自分が生きていくこととの関連の中で、研究とは何かということにもなっていくますね。

村里：哲学が専門の場合、質的研究は新鮮な感じがされるかもしれないですね。ただし最近では臨床心理学系に哲学の研究者が何人か乗り込んでいます。発達障害など研究の対象があり、それを哲学的な言語で表現してみると何だろうという方向性は一つの流れとして割と現象学の分野では活発になっていると思います。少し流行になりすぎているという気も僕はしますが。それよりも我々が体験してる深い経験の中でそれを言語化する方法はあるだろうかといった場合には、ジェンドリンのやり方は割と正統的で、プラトン、アリストテレス、過去のもの皆総動員できますよという方向だと思います。

講演者に対する質問への回答

得丸：なるほど。ありがとうございます。TAE の今後にお話が段々と移ってきましたので、こちらのほうに進めていきたいと思います。その前に先生方が予め読まれた質問でお答え頂けるものがありましたら伺いたいと思います。

高木：混合研究法についてご質問されている方についてお答えします。「TAE が解釈主義ならば、TAE という手法を使用したときに自動的に解釈主義の立場に立つのだろうか」というご質問です。自動的にはもちろんなりません。最近の混合研究法の立ち位置の流れで着目されているのが、質的研究主導型混合研究法です。従来の混合研究法はポスト実証主義に寄りがちでしたが、ポスト実証主義と解釈主義の真ん中あたりに位置するという考え方です。また、「統合は認識論なのか方法の統合なのか、そもそも統合は可能なのか」というご質問がありました。認識論の統合ではなく、研究デザインの段階から統合が必要で、結果の統合というところで実際には表れてきますが、データの収集の段階から統合ができます。詳しくは、非常に分かりやすい入門書『混合研究法入門』（抱井、2015）をご参照ください。

得丸：ありがとうございます。村里先生いかがですか。

村里：僕が話をした最後のところで、西田の文章をジェンドリンのフェルトセンス等々を使って説明している部分がありました。そこがどうしても分からなかったと書いておられる方がおられました。大学生に説明するとしたらどのように説明するのというのは、当然のことです。ただ僕としては、あの部分は割と新しいチャレンジであって、ああいうことを多分誰もやってないと思います。西田の文章は本当に難しいです。それがどのように現代に意味があるかということを経験している方が書いておられますが、「私は具体的にこうします」とか、「こうしていこうよ」というところが弱いような気がしています。哲学の先生たちが『現代の西田哲学』などのタイトルで書かれたものは概ねそのような感じがしています。ジェンドリンと西田の交差を考える時、僕は西田と西谷をセットにして考えています。ヴァレラなどが引用している西谷啓治は、西田先生の一番の高弟でした。三人並んだ系譜の、上田閑照という西谷の弟子が、道元が禅宗によって仏教を再興したが、西田はそれの現在バージョンだと言ってとても評価しています。でもその評価はまだ一般に活用されるほど、易しくかみ砕いたものになっていません。質問されたものに対して僕が感じたことは、確かにそれを高校生、大学生に伝えるように説明できるといういいなと思いますが、まずは、あのまま短いですが繰り返し読んでいただくとよいと思います。そうすると、西田のあの難しい文章が「あー、そういうことだったのかな」というようにほどけてくるという体験をしていただけたらと思います。だから、あの質問は宿題として、今後の新しいテーマとします。僕にはたくさんテーマがありますから。

TAE の今後

得丸：ありがとうございます。それでは最後に TAE の今後について 3 人でお話をしながら締めくくっていききたいと思います。私が TAE のことを説明するときには上手く言葉にできないのですが、それをできるのが TAE でないかと思います。「できないのだったらできないのではありませんか」という自分に対する問いかけが出てきます。でも、尽きないのです。言葉にできてしまうことがないから、部分的に言葉にできたなと思ったらできていないところが次に

でてくるという繰り返して、相変わらず TAE について説明できない、大事なことは説明できないなどというのは、最近とても実感しています。

村里：得丸さん、それは西田の言葉で言うと、述語的ということです。西田は主語的、述語的という言葉を使います。述語的はきりがありません。ジェンドリンが言っているフェルトセンスを言語化するとき「・・・」というのがありますね。dot,dot,dot というのがそうなのです。

得丸：まさに、点、点、点ですね。

村里：それを言葉で説明するのは、点、点、点を含めた述語的なところを主語的なところまで形式化しないといけません。そうすると一応の定義ができます。だけど、点、点、点と一番生きてきたエッセンスは、そのままなのです。述語的なままなのです。いかに述語的な自分というものを楽しむか。なぜ楽しむかという、自分と環境との応答だから、出会いがあり、発見がありますね。それが大事というか、TAE のエッセンスと言え気がしますがね。

得丸：なるほど、そうですね。今回の TAE のシンポジウムも一つの形式で、世の中にある形式を活用しています。青学で予定していたポスター発表もそのような既にある形式の活用とと思っていました。今回の ZOOM もそうですが、形式を活用しながらやはりフェルトセンスの豊かさを確かめることを私はやっていきたいのかなと思います。シンポジウムなどはやらなくてもよいかもしれませんが、毎年 1 回やると決めてやることで、何か形になる部分とならない部分がまた新たにできます。相変わらず TAE を上手く説明したりできないのですが、「研究してみましようよ」とか、「授業で実践してみましようよ」とか、そういうことを私たちは大事にしているのかなと思います。「発表しましようよ」などの呼びかけもしていますが、なかなか上手くいかないところもあります。世間に認められないというのもあります。そのあたりはどのように捉えていらっしゃるでしょうか。

高木：私は結論から言うと現状のままでもいいと思っています。核となるのは得丸先生のコミュニティで、コミュニティの作り方はとてもいいと思います。コミュニティを大々的に広げすぎる必要もないし、逆に小さなコミュニティだけに限定して留める必要もありません。今はいい意味での核は確立されて、連続講座をされながら、形式も活用しています。コミュニティを維持しながらも可能性を少しずつ広げていくというのでいいのではないかと思います。

得丸：いきなり結論が出ましたかね。なるほど、うーん、何でしょう。これでいいと言われても何だろうというのが私の中に常に出てきます。

村里：ジェンドリンも社会的目的があると言っていますし、得丸さんは僕と違って、常識世界にも身を置いておられますから。僕は元々認められるとか、世間が認知するとか、そういうことが意識に上らない人間で、それを意識しようとするとうごく努力が必要です。それは一つは自分はアスペルガーということがあるのだと思います。それでもこのように少し全体的に閉塞した社会の中で、「あの人たち、どうも生き生きしているよね」とか、「何をやっているかよく分からないけれども、意味のようなものを分けあってる、やりとりしてるかな」というふうになっていくといいかなと思いますね。今回僕はいろいろな発表等も聞かせてもらって、そういうふうになっていっているのかなあという感じはしました。だから、得丸さん、「これでいいのでは」というように簡単には言えませんか？

得丸：そういう感じはしないのですけれども。何か認められないという感じがあって。でも、認められないというのは、認められたい自分があるのですが、私がというよりも、フェルトセンスを大切にすることがもっと皆の中で、「それでいいのだ」というふうになっていくことです。これは、ジェンドリン、メアリーから私がもらったものです。非常に自分を励ましてくれますし。これは私だけのものはずはなくて、もっと広がっていくエッジみたいなものを感じているのかなと思います。そこに、今ある研究とか、学校とか、授業とか、これは一つの枠ですが、使えるものは使ってあげたいと思うし、それを使っていかなければ、外的価値に侵襲されてしまいます。それはいつもこちらから、こうしておかないと来てしまうという感じもあるんですよ。そういうところで、自分のエッジがなかなか、ややもすると自分の日常が一生懸命になっていると研究会のことはものすごく後回しになってしまうこともありますし、その中でやはり、今後もこれでいいのだろうか、というのはあります。

村里：学校教育で今ディベートが進学校でかなり導入されています。それを止めてもらって、TAEをやってもらおうという時代になるべきだと僕は思っています。そうなるために、我々が機会があるごとに、「代わりがありますよ」ということを言っていけないといけないですね。そういう意味で方法も大事です。早稲田で話をしていたときに、学生に「成績、業績、地位、お金などの外的価値基準は分かりやすいから目標になりやすいけど、それではもう時代は行き詰ってしまっている」という話をしたら、ある学生は、「自分はほとんどこれまでそれでやってきたと思います」と書いてきました。「でも先生が言っている内的価値基準はどうすればいいですか」と尋ねられ、それに対して、「それを探索していくのがあなたたち若い人達の課題ではないですか」と返したことがありました。そういうやり取りの中にTAEが方法として入ってくる可能性は、大いにあるのかなと期待しますね。

高木：もう一つ、先ほどこのままで良いと言いましたが、もし広げていくという切り口で考えると、一番広げやすいというのは教育だと思います。

村里：なるほどね、そうですね。

高木：教育に関わっている方はいろんな形があり、学校教育もありますし、社会人教育もありますので、TAEは今時代に求められているのではないかと思います。そこをより厚くしていくと広がりが出てくる可能性があるかなと思いました。

得丸：なるほど、ありがとうございます。勤務校の学園研修でTAEの話をさせていただくことがありました。その時に、心理学の先生に教えていただいた国立教育研究所が発行しているキャリア教育に関する資料を使いました。その資料に、「言葉にできないものを大切にすることが大事だ」とちゃんと書いてあって、そういうのを見ると「あー、気が付いているんだ、皆。求められているんだ」ということはとても感じました。その資料の一部を使って話を始めましたが、「求められているし、皆自分の中に持っているのに、なぜ、そこそこが通じないんだろう」ということがとてももどかしく思います。ジェンドリンも「私たちが新しいものを本当に一から作るっていうことはなかなか難しい」、それは言葉ということと言ってますけれども、今あるものを違った意味で使って行く中で何かできればと思います。直接私がやれるのは教育ですね、臨床はやらないので。

村里：臨床心理学をやっている人間として、僕が日々やってるカウンセリングは、カウンセリン

グに限らず、もう少し広範に行動する場合もあります。まさにフェルトセンスから語るということが可能になった場合、その人がしっかりしていくということはもう目に見えています。ただ、一般的な意味では目に見えていないですね。でもそれを目に見えるようにするというのは発表なのです。それは僕はできるし、そのうちクライアントさんが一緒に学会に出てくれるかなという気もしています。

高木：他に、TAEの良さをメタ的に伝えるときに、いろいろな発表がありますが、TAEに携わった方がどのように成長していったのか、どのような変化、変容があったのかということもテーマとしてあるとよいのかなと思います。

得丸：最初にTAEパーソンという言葉をおっしゃりましたが、研究会のメンバーのTさんが、以前からそういうことをおっしゃってくださっています。あと、今回、掲示発表された大阪のTAE勉強会のCさんが、そろそろ次に引き渡したいという中で、TAEパーソンとして10年以上、生活の中にTAEを活かされた方だなあとと思います。そういう方たちを紹介していきたいという気持ちが私の中にあります。パーソンとしてTAE的に生きていくことが自分をどのように励ましていくのかということをお話していただきたいなと思います。今頭に浮かぶのはそのお2人ですが。

村里：いいと思います。ジェンドリンは、「フォーカシング・ピープル」という英語を使っていました。「TAEパーソン」と言っていないが、「TAEパーソン」というのを出していいと思います。

得丸：そうですね。

村里：そういう時期に来てるのではないですか。

得丸：10年以上、15年ぐらいTAEをやっていますので、そのような時期にもなってきたかなと思います。それが一番やりたいことかもしれないというような気もしているところです。

おわりに

得丸：では、最後に一言ずつ、まとめというか総括をお願い致します。

村里：今回のZOOMは本当に難しかったのですが、実際やってみて、いろいろな皆さんの評価も返ってきていますけれども、一言で言うと良かったですね。いろいろな発表の形式があるのだろうけれども、今回コロナウイルスという閉塞状況があったから、こういう形がひねり出されたと思いますが、遠くから参加できてよかったという方がおられましたね。こういう形式も、得丸さん次第でしょうが、何らかの形で継続や発展することは考えられてもいいのかなというのが心に浮かんだ感じです。

得丸：はい、ありがとうございます。高木先生はいかがでしょう。

高木：私もZOOMをやる前はどうかだろうと不安でしたが、結果として新たな可能性の広がりを感じられるとても良い企画だったかなと思います。通常のシンポジウムでは参加者の方からのフィードバックを十分に得られない場合が多いと思いますが、今回皆さんかなり送ってくださいました。それで、新たにまた考えることもできて、準備は大変だと思いますが、今後このような形態も一つのやり方として取り入れていってもよいかなと思いました。

得丸：今いろいろなところでZOOMをやっているのでも、「当たり前になっていますよね」と言わ

れるかもしれませんが、私がシンポジウムを ZOOM でやろうと決めたのは結構前です。実は合宿を取り止めるかどうかを考えた 2 月の半ばくらいには、思い浮かんでいました。その時はまだ世の中はこんなに ZOOM を使っていなかったと思います。私が今言いたいのは、それはフェルトセンスということです。私がフェルトセンスを感じてぐっと動いた時は、何度か数えられますが、その一つとして ZOOM があります。合宿を止める時にシンポジウムの開催も危ないだろうなというのは思っていました。中止の連絡をしないといけないという時に、「ZOOM でやってみよう、止める時ではないでしょう」と感じて、これはフェルトセンスだと私は思っています。1 度しか ZOOM をやったことがなくて、それもよく分からなく聞いているうちにすぐに終わってしまいました。「私にできるのだろうか、皆の前で大恥をかくのでないか、でもそういう問題ではないでしょう」というような一つのフェルトセンスが私に語ってきた、やってきたことなんですね、まさに。やってきたことは、私の人生で何度かありますが、そんなにたくさんはないです。それで、事務局の坂野さんに相談して、次は村里さんに相談して、高木先生に相談して、まず意思を固めました。特別講演だけでもできないだろうかというところから段々準備を進めてきて、ZOOM でやることを皆さんにきちんと呼び掛けたのはだいぶ後ですね。だから、フェルトセンスってすごいなというのは、今回のことでも私は感じました。身体はそういう形で自分に思いもよらない語りかけをしてきます。「えっ、私が ZOOM？あなた大丈夫なの？」という感じでしたね。でも、「それは、自分が大丈夫かとか、そういう問題ではないでしょう」というような。フェルトセンスの確かさを感じた一つのエピソードとして、ちょっとお話をさせていただきました。ZOOM のことに話が集中しましたが、最後に他にまとめとしておっしゃりたいことがあれば伺って閉じたいと思います。いかがでしょうか。

村里：得丸さんのその感じは脈があるということですよ。

得丸：さっき、そうおっしゃっていました。脈がある、そうかもしれません。脈があるとは思ったのでしょね、出てきたときに。

村里：その中に可能性は織りなすように動いているのだと思います。

得丸：暗在しているものですね。

村里：そうです。

得丸：なるほど。ZOOM に関してはもう少し語れるエピソードあるのですが、今回は止めておきます。本当につながっていたと思います。それは脈があるという感じとして、そのパターンは何となく割とあっているのかもしれませんが。なるほど、ありがとうございます。高木先生はいかがでしょう。

高木：人をホールで捉えることが大事で、人生に TAE がとても生きそうかなということと、TAE パーソンとして生きるという得丸先生の思いを改めて受け止めました。

得丸：ありがとうございます。今回、高木先生が TAE の良いところをスライドにしてくださいました。それはとても嬉しかったです。その中に人としての成長ということもちゃんと最後に入れてくださっていました。あのスライドは私が作ったのでは、つまらないのだけれども。しばらく高木先生と TAE 研究会はそんなに距離が近かったわけでもないですよ。そういう中でお互いにきちんと仕事をしていく中で、声をかければ本当にいつでも応じてくださる

し、それだけでも十分すぎると思っていたところに、あのようスライドで素晴らしく述べていただいたことが、私もとても嬉しくて、本当にやってよかったと思っています。それから、村里先生の今回の講演も、もう一度西田に戻ってくださったことが、私はすごく嬉しかったです。

村里：そうなのですね。

得丸：私にとっては、西田という、西田・西谷、上田先生もそうなのですが、やはりそこに、日本に生きている私たちとジェンドリンとの出会いのところを、もちろん宗教もあるのだけでも、まず西田のところ踏ん張ってみたいのです。宗教はありますが、そこにいくと何かちょっと違うと思います。私は西田でもう一回頑張りたい。自分も全然まだ頑張っていないです。そこを村里さんともう一回やれるような感じがして、今回の講演はとても良かったです。

村里：そうですね。西田・西谷は明治以降の漱石もとても気にしているいろいろ書いています。理由は、明治以降の近代化というテーマです。それはあのようになかなか進まざるを得なかったのだからけれども、「それはどう進んだのだろうか」、「どう深く進まなかったのだろうか」、「課題は何なのだろうか」、そういうことを彼らはずっと深く意識して考えていました。その結果、戦後これだけ 75 年経って、僕はちょうど戦後ですが、やはり課題が未解決なものがぼろがら始まっています。そこを彼らに返るといっても、彼らが提示したものを引きつけて「こう考えていかなければいけない」という感じですね。そのことと TAE のジェンドリンは色濃く交差するのです。それは僕は事柄の一致だと思っています。逆に言えば、ジェンドリンの中には、ヨーロッパ、ユダヤ、皆そういうものが流れているではないですか。アメリカ、ウィリアム・ジェームズもそうです。ところが、グローバル化したといっても、飛行機は飛びますが、心というのはそう簡単でないし、それを形にするのはなおさら簡単ではないです。でもそれは個人が問われているし、歴史が問われているのであって、そのことと TAE はとても関係があると言えると思います。ぜひ続けていきましょう。

得丸：ありがとうございました。今回、プログラムがとても良かったというフィードバックもいただきました。これもあまり考えてやったことでもないのですが、本当に偶然のような感じで、高木先生のご講演と村里先生のご講演、それからそれぞれの分野の発表と、全体で、様々なところにきちんと配置できて良かったと思っています。いろいろ運営の足りないところがたくさんありましたが、今後も TAE コミュニティを一緒に盛り立てていただきますようにどうぞよろしくお願い致します。では、今日は本当にありがとうございました。

高木：ありがとうございました。

村里：ありがとうございました。